

平安時代の調査

平安時代には畑作が行われたようで、畝のあとを発見しました。一方、柱穴や井戸など、集落の存在を窺える遺構は検出できませんでした。しかし、集落と畑地は隣接するように検出される場合が多く、人々が住んでいた場所は、付近に存在する可能性が高いと見られます。

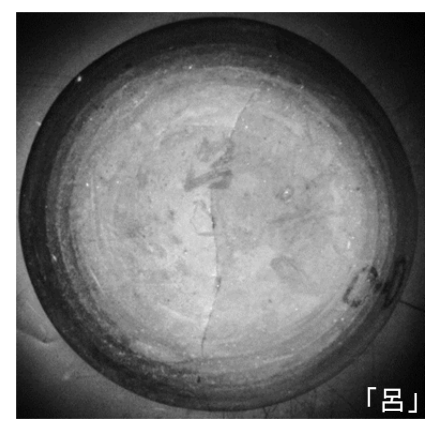
また、調査区西端に向かい、地形が大きく落ち込んでいましたが、その境付近に境界杭の列を発見しました。この杭列を挟み、高い東側では畑が、低い西側では水田が築かれたと考えられます。



畑のあと



出土した土器 須恵器・土師器が多数出土しました。これらはことさら遠くから運ばれたとは考えにくく、付近に集落が存在したことがうかがえます。須恵器は佐渡小泊窯産が最も多く約5割、笹神窯産など阿賀北産が4割、その他が1割です。また、復元率が高いことが特徴的です。遺物が集中的に出土した範囲はおよそ80㎡に過ぎませんが、13個体をもとの形に復元できました。



墨書土器 墨で字が書かれた「墨書土器」が15点出土しました。「王」が7点と最も多く、「王」に似た「三十」の記号が3点、「寺」が1点、「呂」が1点、判読不明が4点であります。文字が書かれた理由は諸説ありますが、「寺」の字は、寺から出土することが多いようです。

鎌倉～室町時代の調査

鎌倉～室町時代の井戸・柱穴などを発見しました。柱穴には柱の根元が腐らずに残っているものもありましたが、調査範囲が狭く、柱同士の組み合わせを見出すことはできていません。井戸は、深さ 60 cm ほどの浅いもののみです。柄杓で水をすくっていたらしく、柄杓が底部から出土する事例も見られました。井戸は浅いものの、いずれも水が湧き出す粗砂層を掘り抜いており、この深さでも水を得ることはできたと考えられます。発見した井戸 23 基のうち、12 基に曲物が据えられていたことが特徴的でした。粗砂層は、湧水によって崩落するため、土留めが必要であったと考えられます。また、水溜りに曲物を据えた縦板組横棧留構造(表紙の井戸)のものも 2 基認められました。

井戸の覆土には、必ず泥炭層(腐植)が存在しました。これは、アシ(ヨシ)などの植物を、一挙に埋めた形跡と見られます。現在でも井戸を埋める際には「埋めて良し」に掛けて、梅とヨシを投げ込むといひます。このような風習が、当時存在したと考えられるかもしれません。井戸には、井神が宿るとされることから、埋め戻し時には、一定の儀式が行われたようです。井戸底から白磁や漆器椀が出土したもの、祭祀遺物や晴れの場で使われるとされる両口箸がまとまって出土したもの、板材が据えられるように出土したもの、銭貨(渡来銭)がさしの状態で出土したもの、経石が出土したものなど、様々な様子を観察できました。



両口箸がまとまって出土した井戸



曲物内に板が据えられた井戸



曲物内に板が据えられた井戸



柄杓が出土した井戸

板を 1 枚ずつ慎重に取り上げていったところ、底から 16 枚の銭貨が出土。

